

ドゥッチョの『マエスタ』における物語表現

「マニエラ・グレカ」、およびジョヴァンニ・ピサーノとのかかわりをめぐって

東京芸術大学大学院後期博士課程

吉澤早苗

中世末期のシエナ画家ドゥッチョ・ディ・ブオニンセーニャの『マエスタ』(1308 11年 シエナ、大聖堂附属美術館蔵)は、シエナ大聖堂の主祭壇のために制作された大祭壇画である。そこに描かれたキリスト伝・マリア伝のサイクルは、50 場面以上におよぶ規模の大きさと、かつてなく豊かな説話性によって知られている。この大がかりなサイクルの創造源を特定のモデルに求めることはできないが、物語表現の根底にあるのは、ドゥエチェントより続く「マニエラ・グレカ」の伝統である。『マエスタ』が制作されたトレチェント前半、トスカナにおけるギリシア様式の伝統は終息しつつあったものの、ビザンティンの美術がイタリア絵画の創造になお刺激を与えていたことは、O. デームスらによって指摘されてきた。ドゥッチョはマニエラ・グレカの継承者として、過去のシエナ派以上にビザンティン絵画の技法や表現のレパートリーに通じていた。しかし、画家は同時に、東方絵画が達成することのなかった三次元的な空間のイリュージョンを画中に呼び込み、聖なる物語の現実化・世俗化を図った点で、マニエラ・グレカとの本質的な違いを見せている。『マエスタ』の説話サイクルは、1200 年代後半のアッシジで始まった物語絵画の革新に続くものであるが、ドゥッチョの表現様式の形成過程については、十分明らかにされていない。本発表では、マニエラ・グレカからの方向転換をうながした一契機として、ドゥッチョとほぼ同世代の彫刻家ジョヴァンニ・ピサーノとのかかわりに着目したい。そこでまず、空間表現に関するビザンティン絵画との相違に留意しながら、『マエスタ』の造形的特質を確認したうえで、ドゥッチョの物語絵画とジョヴァンニの浮彫芸術の類縁性を具体的に考察してゆく。

『マエスタ』の物語サイクルが、説話的性格を増した 13 世紀後半以降のビザンティン絵画と多くのモチーフを共有することは、これまでも言及されている。だが、絵画空間の構築にあたり、ドゥッチョがそれらのモチーフをいかに選択し、改変したかを観察するなら、特に人物の構図法に関して、東方との違いが明らかになるだろう。『マエスタ』の人物像の造形は線と面とに強く支配され、個々の身体は三次元的量感に乏しいものの、彼らの仕草はさまざまな手段を用いて周囲の環境と関係づけられている。いくつかの場面では、人物群の一連の動作が物語の舞台に奥行きや広がりを与え、絵画空間の一貫性を確保するための要因ともなっている。そうしたドゥッチョの人物構図には、浮彫芸術の分野で、浅いフリーズ状の構図を克服し、物語の出来事をより深い空間の中で展開させようとしたジョヴァンニ・ピサーノとの類似が認められる。これまで、ドゥッチョとジョヴァンニの親近性は、シエナ大聖堂の聖堂彫刻や堂内の説教壇浮彫との比較から、主にゴシック的なドレーパリー表現において論じられてきた。ここではさらにシエナ以外の彫刻作品にも目を向けて、人物像を異なる空間層に位置づけ、彼らに連続的な動きを付与することで物語場面に一層の奥行きと統一感を確保しようとする手法においてもまた、ジョヴァンニの造形がドゥッチョの様式に結びつく可能性を提起したい。